

+ 西田 祐樹 社長

特別
対談

+ 指揮者 梅田 俊明 さん

音楽がつなぐ、 地域と 企業の 想い



第18回UBEクラシックコンサート

2008年にスタートし、今年で18回目を迎えるUBE主催のクラシックコンサート。会場となるのは、昭和初期に建てられ、現在は重要文化財にも指定されている渡辺翁記念会館。クラシック音楽を通じて地域と共に歩む本取り組みについて、西田祐樹社長と、3度目の出演となる指揮者・梅田俊明さんが語り合った。



+ 西田 祐樹

1987年広島大学大学院修了後、宇部興産（現UBE）入社。化学分野で製造・開発・営業・欧州駐在を経験し、2016年執行役員、2025年よりUBE代表取締役社長、CEOに就任。

+ 梅田 俊明

東京生まれ。桐朋学園大学卒業後ウィーンに留学。国内主要オーケストラと共演を重ね、のちカンタービレにも参加。誠実な音楽づくりに定評がある実力派指揮者。

「共存同栄」の精神から始まった音楽活動

西田: 当社の創業の精神には「共存同栄」という言葉があります。同じく栄える、つまり地域とともに発展していくという考え方ですね。クラシック音楽を通じて地域に貢献することは、この精神にかなう取り組みだと考えています。特に宇部という街は、クラシック音楽の愛好家も多くいらっしゃいますし、地域との親和性も高い。2007年に創業110周年を迎えたことを機に、2008年からこのUBEクラシックコンサート(当初は「宇部興産グループチャリティーコンサート」)を始めました。社員たちも誇りを持って運営に関わってくれていて、非常にモチベーション高く準備に取り組んでくれています。

梅田: 私は2014年に初めてこのコンサートで指揮をさせていただきましたが、そのときからホスピタリティが本当に手厚くて、心を動かされたのを覚えています。お客様も温かく迎えてくださり、演奏しながらとても心地よい空気を感じました。今回が3回目になりますが、またこの宇部の地で演奏できることを楽しみにしています。

響きに“嘘がない” 渡辺翁記念会館

会場となる渡辺翁記念会館は、創業者のひとり・初代社長であり、宇部市の発展に寄与した渡辺祐策翁の功績を顕彰するために建設し、宇部市に寄贈する形で開館した(設計者 村野藤吾氏)。2005年には国の重要文化財に指定されている。

西田: このホールは音響が非常に良く、宇部市の音楽文化振興にも長年貢献してきました。当社は日本フィルハーモニー交響楽団(以下「日本フィル」)さんとのつながりも深く、毎年この渡辺翁記念会館で演奏していただけていることに感謝しています。

梅田: 最近のホールは、非常に豪華な設計がなされています。ですが、そのぶん音が“飾られすぎている”と感じることもあるんですね。渡辺翁記念会館はその逆で、響きに嘘がない。いわば“素肌美人”のような、ありのままの響きなんです。休憩中に客席を回ってオーケストラの音を聴いてみたんですが、とてもナチュラルで、懐かしさすら感じました。お客様の表情までも見えるような空間で、音楽との距離が近くなる特別な会場ですね。

西田: 私も先日、このホールで株主総会を開催したのですが、中央の席に立つのは初めてで、かなり緊張しました(笑)。照明が上からも前から来るので体感温度も高く、まさに“舞台の真ん中”の熱を感じました。演奏される方は本当に大変だと思いますが、それだけ集中力が高まる空間なんだと思います。



子どもたちにこそ、生の音楽を

2022年には、本公演の招待対象を宇部市内の中学生から山陽小野田市および美祢市を含めた小中学生に拡大。計400名の児童・生徒を無料で招待している。

西田：子どもたちに、「フルオーケストラの生演奏を届けたい」という強い想いから、プロによる本格的なオーケストラ公演が実現しました。地域に根差した音楽文化の振興と、将来の担い手を育てるきっかけになればと思っています。

梅田：大都市ではオーケストラに触れる機会もありますが、地域ではそれが簡単ではない。だからこそ、この取り組みはとても大きな意味があると思います。400名というのも、すごいですね。2回、3回と公演ができれば、もっと多くの子に体験してもらえますね。とても素敵な取り組みだと思います。

指揮と経営、「人を動かす」という仕事

梅田：指揮者というのは、音を出さない演奏家なんです。スコアにはすべてのパートが書かれていますが、プレーヤーはそれぞれ自分のパート譜を見て演奏しています。その中で全体をまとめていくためには、テンポや表現について、個々のイメージを尊重しながらも、最終的に方向性を示していく必要がある。決して力で押さえつけるのではなく、共感を引き出す。話術や身振りも含めて、演奏者と向き合っていく仕事です。

西田：非常に共感できますね。私も以前は研究の現場で化学物質や実験器具を相手にしていましたが、今は人を動かす立場になりました。人の気持ちを動かすことの難しさ、そして面白さ。まさに、指揮者の仕事と通じるものを感じます。

梅田：心が通じて一体感が生まれる瞬間は、演奏者にとっても指揮者にとっても至福のときです。指揮者とオーケストラの意見が噛み合わず、火花を散らすようなときでさえ、逆に演奏のエネルギーが高まることもある。予定調和ではない“生の力”がそこにあると思います。

西田：ビジネスの現場でも、やはり大事なものは方向性を示すこと。そして個性ある社員たちが、どう調和しながら成果を出せるか。その意味でも、指揮者の役割は経営者と非常に似ていますね。



“新世界”を聴きながら、新たな挑戦へ

今年の演目は、ドヴォルジャークの交響曲第9番《新世界より》。この作品は、彼がニューヨーク音楽院の校長としてアメリカに滞在していた3年間のあいだに書き上げたものだ。

梅田：アメリカ先住民の音楽や黒人霊歌に触れた影響もあるようですが、ドヴォルジャークはそれらを模倣したわけではなく、自身のボヘミア的語法で再構成しています。つまり彼の視点で新大陸を見たときに生まれた郷愁——祖国への思いが色濃く反映されている。この“ノスタルジー”こそが、この曲の大きな魅力だと思います。さらに今回は、日本フィルの首席ホルン奏者・信末さんのソロにもご注目いただきたいです。ホルンは非常に難しい楽器なのですが、彼の表現力は本当に素晴らしい。ソロの場面も、この公演の見どころの一つになると思います。

西田：今のお話を伺って、ますます楽しみになりました。メロディーはもちろん耳に残っていますが、曲全体にそんな構成の工夫があるとは……初めて知りました。実は、当社もまさに今、“新世界”に挑戦しているところなんです。アメリカで新工場を立ち上げ、現地に根付いた事業展開を進めていこうとしています。地域に貢献しながら、アメリカの企業文化の中にしっかり入り込んでいきたい。その意味でも、今回この“新世界”を生で聴けることには、強いシンパシーを感じます。

生の音楽にしか、伝えられないものがある

梅田：今は音楽が溢れすぎて、無意識に聞き流してしまう時代です。だからこそ、“生”の演奏に足を運び、その場の空気を感じてほしい。プロのオーケストラが全身全霊で奏でる音楽には、録音や配信では伝えきれない力があります。子どもたちにも、ぜひその体験を味わっていただきたいですね。

西田：本当にその通りです。エフエムきららで生放送も行っていますが、やはり“生”の迫力は別格。多くの方に会場にお越しいただき、この空間ならではの感動を一緒に味わっていただけたらと思っています。



第18回 UBEクラシックコンサート

2025年10月12日開催予定／宇部市渡辺翁記念会館（山口県宇部市）

- 指揮：梅田俊明
- ソリスト：信末碩才（ホルン）
- 管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団

曲目

前半 モーツァルト：歌劇《フィガロの結婚》序曲（K.492）

ホルン協奏曲第1番 二長調 K.412/386b

ホルン協奏曲第3番 変ホ長調 K.447

後半 ドヴォルジャーク：交響曲第9番ホ短調《新世界より》作品95, B.178

UBEグループは2008年より、音楽を通じた地域文化振興を目的にコンサートを開催。2022年からは「UBEクラシックコンサート」と名称を変え、子供の音楽教育支援に力を入れています